

超繰り上げ現象について

小林 敏彦

1. Introduction

(1) のような超繰り上げ (superraising) 現象は, GB 理論において、一般的には許容されないとされていた (cf. Chomsky (1986), Rizzi (1990), Lasnik & Saito (1992))。

(1) *John_i seems [_{CP} that [_{IP} it was told t_i [that Mary is a genius]]].

しかしながら、Ura (1994) は、(2b) の Moroccan Arabic の例に示されているような超繰り上げ現象が自然言語には多く存在すると観察している。¹⁾

(2) Moroccan Arabic (cf. Harrel 1962, Wager 1983 (cited from Ura 1994:10))

a. Ttshab li [belli šaf- ϕ -ha muhend
seemed-3SG-to-1SG COMP saw-3SGM-3SGF Mohand
mmi fsefru].

mother-1SG in-Sefrou

‘It seemed to me that Mohand saw my mother in Sefrou.’

- b. Ttshab-et-li mmi_k [belli šaf- ϕ -ha
 seemed-3SG-F-to-1SG mother-1SG COMP saw-3SGM-3SGF
 muhend t_k fsefru].
 Mohand in-Sefrou
 ‘Lit. My mother_k seemed to me that Mohand saw t_k in
 Sefrou. (same meanings as (2a))’

Ura (1994: 12)によると、(2b)は埋め込み文の目的語として基底生成されたDPの *mmi* ‘my mother’ が、埋め込み文主語 *muhend* を超えて主文主語位置にA移動している超繰り上げ現象であるとする。彼は、(1)が許されないのは相対化最小条件 (Relativized Minimality Condition: RMC) と非合法的なA-A’-A移動の禁止によるとし、(2b)のような超繰り上げが可能であることは(3)の一般化に基づいて説明しようとする。

(3) Generalization:

If a language allows the so-called “Multiple Subject Construction”, then it also allows superraising to take place.

本稿では、(1)と(2b)の違いは、異なる現象ではなく純粹素性照合理論 (a theory of pure feature movement) によって統一的に説明することが可能であることを示す。

第2節では、Ura (1994) の(1)の非文法性と(2b)の文法性についての説明を概観し、その問題点を指摘する。第3節では、純粹素性照合の理論を提出し、それによって(1)と(2a, b)が理論的に異なる原理によって説明されるものではなく、統一的に説明できるということを主張する。第4節は議論のまとめである。

2. Ura's (1994) Explanation on Superraising

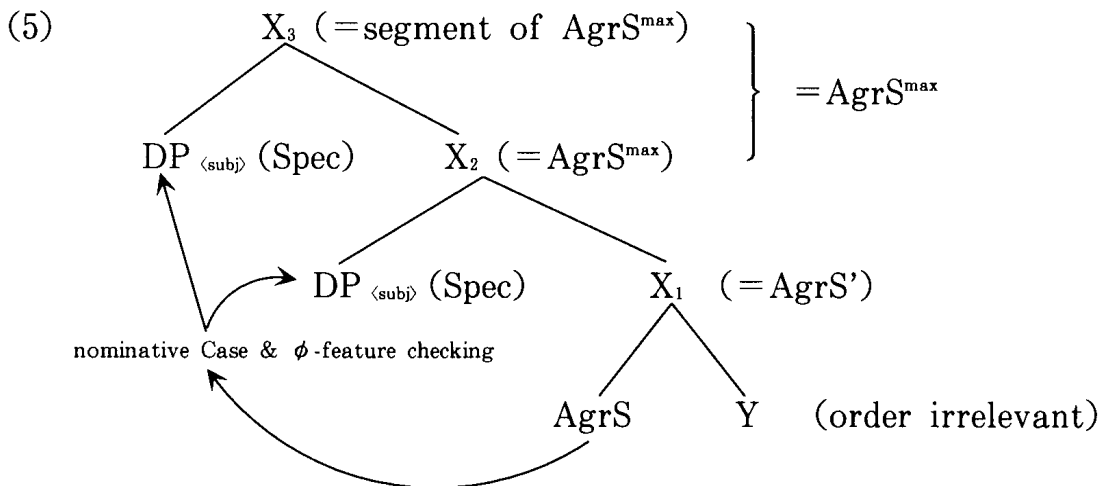
Ura (1994) は (1) のように超繰り上げが許容されない言語は RMC と非合法的な A-A'-A 移動の禁止によって排除されるとする ((1) を (4) として再掲)。

(4) *John_i seems [_{CP} that [_{IP} it was told t_i [that Mary is a genius]]].

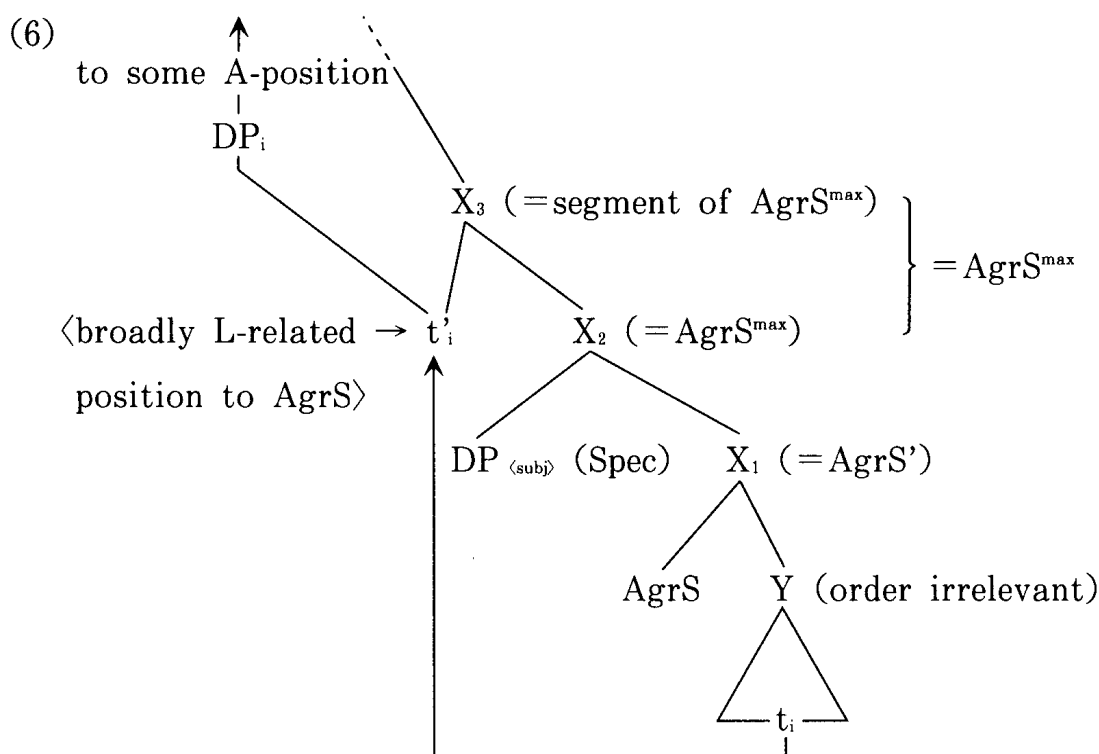
(4) において、*John* の埋め込み文の目的語位置から主文主語位置への移動は A 移動であり、この移動は別の A 位置である埋め込み文主語を超えることになり、RMC 違反を生じる。RMC 違反を回避するためには、*John* は主文主語位置へ移動する途中で *John* と埋め込み文の主語位置とが等距離になる位置に着地しなければならない。*John* の着地点としては [Spec, C] と埋め込み文の AgrSP に付加した位置 (埋め込み文 AgrS に対して broadly L-related position) のみはその候補となるが、[Spec, C] は A' 位置であり (Chomsky 1992: 40)、さらに、英語では付加位置は A 位置とはならないので、埋め込み文 AgrS に対する broadly L-related position は A 位置ではない (cf. Ura 1993a, b)。従って、*John* の主文主語位置への移動のために [Spec, C] も埋め込み文 AgrSP への付加位置も利用することができない。それは、どちらの場合も、非合法的 A-A'-A 移動の禁止に違反することになるからである。このように、*John* の主文主語位置への移動は、RMC か非合法的 A-A'-A 移動の禁止に違反することになり、そのような移動の方法は無いということになり、(4) はどのようにしても収束しないという結論になる。

このような超繰り上げ現象を許容しない言語に対して、Ura (1994) は多重主語構文 (Multiple Subject Construction: MSC) は (3) の一般化を前提に、MSC を許容する言語では AgrS と T は関連する素性の

multiple set を照合できるが、MSC を許容しない言語ではそれが許されないというパラミター的な考えを提出し、MSC の構造は (5) のようであるとするとする。



ここで、Ura (1994) は (5) の外側の主語位置 (outer subject position) は AgrS に対する broadly L-related position と等価 (equivalent) であるとし、broadly L-related position が超繰り上げを許す言語において A 位置になると考えれば、そのような言語では、この位置を非合法的な A-A'-A 移動の禁止に違反することなく escape-hatch として利用できるとして MSC を許容する言語で超繰り上げが可能であることを説明しようとする。即ち、(5) の外側の主語位置は MSC を許容する言語において、そこに DP が現れることができるので、独立して A 位置として認可される。ここで、MSC を許容する言語において、その AgrS に対する broadly L-related position が A 位置になり得るとすると、(6) に示すように、そのような言語では、非合法的な A-A'-A 移動の禁止に違反することなく超繰り上げがその位置を利用することができることになる。



しかしながら、このような Ura の説明には (7i-iii) に示すような問題点がある。

- (7) i) なぜ MSC を許容する言語では broadly L-related position が A 位置として考えられ、そうでない言語ではそれが許されないのか。MSC を許容する言語では DP がそこに生じることができるといのはトートロジーにすぎない。
- ii) もし、(5) に示されているように、 X_3 の指定部において DP の格と ϕ 素性が照合されるとすれば、(6) に示されているような DP_i の主文主語位置へのさらなる移動は何によって駆動されるのか。
- iii) さらに、(6) において、 X_2 と X_3 が $AgrS^{max}$ の segment である (つまり、 X_2 指定部の DP と X_3 指定部の DP_i が等距離である) とすれば、なぜ X_3 指定部の DP_i でなく X_2 指定部の DP が主文主語位置に移動できないのか。

(5) の MSC の構造に基づく (6) の超繰り上げ現象の説明は単なる措定でしかなく、Ura (1994) では (7) に挙げた問題に対する原理的な説明は示されていない。

本稿においては、次節で提案する純粹素性照合理論により、(1) と (2) の違いが特別な措定を必要とすることなく、自然に説明できるということを示す。

3. Pure Feature Checking and Superraising

本稿では、(8) に示す極めて単純な純粹素性照合理論 (Pure Feature Checking: PFC) のみによって narrow syntax の派生が進行し、それによって超繰り上げ現象の事実が容易にかつエレガントに説明できるということを示す。

(8) 純粹素性照合 (Pure Feature Checking: PFC)

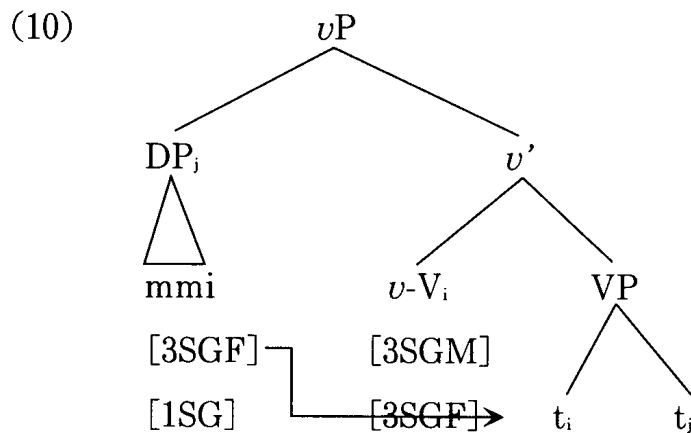
- i) narrow syntax の派生は解釈不可能素性の照合によってのみ駆動される。
- ii) 解釈不可能素性は、照合可能な適切な構造関係になれば、直ちに照合・消去の操作が遂行される。
- iii) Spec-to-head の構造関係になれば、解釈不可能素性は照合・消去される。²⁾

まず、Moroccan Arabic の (2a) の派生を考えよう ((2a) を (9) として再掲)。

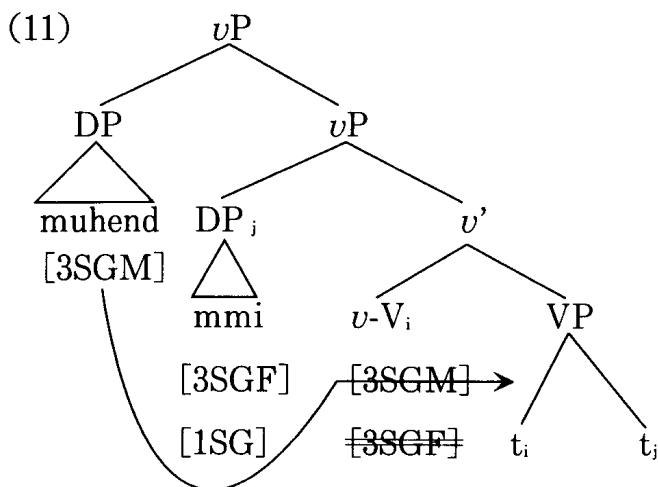
(9) Ttshab li [belli šaf- ϕ -ha muhend mmi
seemed-3SG-to-1SG COMP saw-3SGM-3SGF Mohand mother-1SG
fsefru].
in-Sefrou

‘It seemed to me that Mohand saw my mother in Sefrou.’

(9) は $[_{vP} v [_{VP} \text{šaf-}\phi\text{-ha mmi]]$ の構造から、 $V_{\text{šaf-}\phi\text{-ha}}$ が v に繰り上がると、 DP_{mmi} が vP 指定部に移動する事によって DP_{mmi} の ϕ 素性 [3SGF] が (10) に示すような $V_{\text{šaf-}\phi\text{-ha}}$ の解釈不可能な ϕ 素性 [3SGF] を照合することのできる構造関係 (10) になり、これが照合・消去される。



(10) の構造から DP_{muhend} が vP の外側の指定部に併合し、これが、(11) に示すように $v-V$ と Spec-to-head の構造関係になり、 DP_{muhend} の ϕ 素性 [3SGM] によって $v-V$ の解釈不可能素性 [3SGM] が照合・消去される。



(11) からの派生は、外側の vP に T が併合し、その T に $v-V_i$ が繰り上がり、その TP に補文標識 *belli* が併合する。さらにその CP に主文動詞 *ttshab li* ‘seemed to me’ が併合し、(9) の構造として収束する。*ttshab li* の ϕ 素性の照合については、(9) の構文には主文主語として *pro* があると仮定し、それによって照合・消去されると考える。³⁾

(2a) がこのように収束すると考えると、(2b) の超繰り上げ現象は非常に単純な現象となる ((2b) を (12) として再掲)。

(12) *Ttshab-et-li* *mmi_k* [*belli* *šaf- ϕ -ha*
 seemed-3SG-F-to-1SG *mother-1SG* *COMP* *saw-3SGM-3SGF*
 muhend t_k fsefru].
 Mohand *in-Sefrou*
 ‘Lit. My *mother_k* seemed to me that *Mohand* saw *t_k* in
 Sefrou.’

つまり、*mmi* の ϕ 素性が主文動詞の ϕ 素性を照合するために narrow syntax において *ttshab-et-li* (の ϕ 素性) と Spec-to-head の構造関係になるために主文主語位置に移動し派生が収束していると考えられる。⁴⁾

次に、英語などの言語で超繰り上げが許容されない理由を考えよう。これも (8) の PFC を考えると、RMC や非合法的な A-A'-A 移動の禁止違反に訴えることなく、極めて単純、かつ簡潔に説明できる。

(13) **John_i* seems [_{CP} that [_{IP} it was told *t_i* [that *Mary* is a genius]]].

(13 (=1)) は派生の過程で (14) の構造を形成する。

(14) [_{IP} was told *John* [that *Mary* is a genius]]

この構造で、(8 iii) を満たすために (8 ii) から、補文内の *v* の解釈不可能素性を照合するために、*John* (の ϕ 素性) が直ちに補文の TP 指定部に移動し、(15) のようになるとすると、その解釈不可能素性を照合・消去し、*John* がそこからさらに主文主語位置へ移動する理由は無くなりその場に留まることになる。

(15) [_{IP} John_i was told t_i [that Mary is a genius]]

ただし、Numeration に *it* が取り出されていないとすると、(16) の構造が英語でも narrow syntax で派生され、収束することになる。

(16) John_i seems [_{CP} that [_{IP} was told t_i [that Mary is a genius]]]

本稿の議論においては、これを排除する理由はない。本稿では、これは言語の一般特性としては可能な派生であり、narrow syntax においては排除されるものではないと捉える。⁵⁾

4. Concluding Remarks

本稿では、第2節で、超繰り上げ現象を示す言語とそれが許されない言語についての Ura (1994) の説明には (7) に挙げた問題点があることを指摘し、第3節において (8) の純粹素性照合 (PFC) を提案した。この PFC によって、超繰り上げを特別な現象と捉える必要は無く、単純な照合理論において説明できるということ、及び、超繰り上げは narrow syntax においては一般に収束するものであるということを示した。

注

- 1) (2b) が超繰り上げ現象であること、また、超繰り上げ現象が Moroccan Arabic 以外にも多くの言語で観察されることについては、Ura (1994) を参照されたい。本稿では、超繰り上げ現象の例として特に Moroccan Arabic だけをとりあげることにする。
- 2) narrow syntax の構造関係においては、Spec-to-head の関係しか存在せず Head-to-Spec (m-command) のような構造関係はないということについては、Chomsky (2001) を参照されたい。
- 3) Ura (1994: 12) を参照。
- 4) Moroccan Arabic で主語が主文動詞の後に生じることに関しては、Ouhalla (1994) 及びそこに示されている文献を参照されたい。
- 5) (16) は英語 (及び他の超繰り上げ現象を示さない言語) においては、PF インタフェースで排除される個別言語特有の現象であると考えられる (cf. Chomsky (2001))。

参考文献

- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1992. *A Minimalist Program for Linguistic Theory*. MIT Occasional Papers in Linguistics #1, Cambridge, Mass.: MITPWL.
- Chomsky, Noam. 1995. "Categories and Transformations," *The Minimalist Program*, 219-394. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. "Beyond Explanatory Adequacy," ms.
- Coopmans, Peter. 1994. "Comments on the Paper by Ouhalla," *Verb Movement*, ed. by David Lightfoot and Norbert Hornstein, 73-85. Cambridge: Cambridge University Press.
- Harrel, S. Richard. 1962. *A Short Reference Grammar of Moroccan Arabic*. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Lasnik, Howard, and Mamoru Saito. 1992. *Move α* . Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Ouhalla, Jamal. 1994. "Verb Movement and Word Order in Arabic," *Verb Movement*, ed. by David Lightfoot and Norbert Hornstein, 41-72. Cambridge: Cambridge University Press.

- Rizzi, Luigi. 1990. *Relativized Minimality*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Ura, Hiroyuki. 1993a. "On Feature-Checking for Wh-traces," MIT Working Papers in Linguistics #18, 243-280. Cambridge, Mass.: MITWPL.
- Ura, Hiroyuki. 1993b. "L-Relatedness and its Parametric Variation," MIT Working Papers in Linguistics #19, 377-399. Cambridge, Mass.:MITWPL.
- Ura, Hiroyuki. 1994. *Varieties of Raising and the Feature-based Bare Phrase Structure Theory*. MIT Occasional Papers in Linguistics #7, Cambridge, Mass.: MITWPL.
- Ura, Hiroyuki. 1996. *Multiple Feature-Checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Wager, Janet Stephanie. 1983. *Complementation in Moroccan Arabic*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.